すり替えられた棺桶姫

麻龍 星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すり替えられた棺桶姫

【Ｎコード】
Ｎ４７５３Ｊ

【作者名】
麻龍　星

【あらすじ】
正木　和架〈まさき　のどか〉の人生の狂いは、すべて奇天烈変人星オタクに会ってしまったその時点で１８０度の変化を遂げた。出生不明年齢不詳及び名前をわからぬ彼から『私と星の観察日記を作成しないか？』と誘われて早半年、そして今日私は彼のＭｙホーム（↓天体観察塔）の屋上から道連れ飛び降り自殺を決行されて――！？　棺桶の中で目覚めるは、ただ今進行形でヒドイ目に合ってます。★棺桶姫の誕生９―ＵＰ！★

《登場人物》（前書き）

参考にして読まれるといいと思います。《登場人物》の追加は随時、行っていきます。

《登場人物》

正木　和架／Ｍａｓａｋｉ　Ｎｏｄｏｋａ――――高校三年生の女子高生。

ロビュスト・メイユール・アヴェルス／Ｒｏｂｕｓｔｅ・Ｍｅｉｌｌｅｕｒｅ・Ａｖｅｒｓｅ　――――アヴェルス国現国王。

ラルム／Ｌａｒｍｅ――――ロビュストの側近〈文官〉。

エシェック／Ｅｃｈｅｃ――――ロビュストの側近〈武官〉、直属の騎士団の団長。

アトゥ／Ａｔｏｕｔ――――王直属の騎士団のメンバー。

シエル／Ｃｉｅｌ――――王宮の筆頭女中。和架曰く『できる女』。

名前年齢不詳な男――――――変人奇人天体観察塔の管理人。

序章「はじまりは奇天烈星オタクの導きで」

「――――この地球の先に僕らの夢がある」

塔の屋上に固定した望遠鏡、それをのぞき込んでいた私の隣に来て彼は誇らしげに呟いた。

「飲むか？」

数時間前に自室に引き籠もったはずの彼の登場に驚きつつ、望遠鏡から静かに顔を放してマグカップを一つ彼の手から受け取けとった。

夜風に煽られて風邪でも引かないよう一応は厚着をしているが、急激の冷え込みに耐えきれなくて自宅から持ち込んできた毛布を体に巻きつけて寒さを凌いでいたので、彼の差し入れは嬉しかった。マグカップを通して感じる少し熱い温かさがまた心地よくて冷えた頬に当てて体温を上げ、上がる湯気とともに芳ばしい匂いが漂ってきた。

良い香り。

「……」
「どうした」

差し入れを持ったまま、黙り固まっている少女に不思議を抱いた彼は顔をぐっと彼女に近づけけた。それに彼女は気付かない。

「……甘い。何、この気だるい甘さは……砂糖がいれすぎなんじゃ――うわっ」

耳に生暖かい風が首筋に触れる――「な、何ですか！」突然の出来事に彼の体を押し、飛び退いた。

し、心臓に悪すぎる。ただでさえ異臭を漂わせ（服及び着ている白衣は洗濯済みだが、風呂には何週間も入っていない。ちなみに洗濯は私がやった。風呂は残念ながらこの施設にはなかった）、と飛びに飛び跳ねた寝癖に目の下にはグビィーとマジックで書いたような隈ときたものだ。驚くのも当たり前、というかどこぞのお化け屋敷の驚かし役限定の担当員かなにかですか、あなたは。

「コーヒーだが」
「こ、これがコーヒーといえる代物ですかっ！　砂糖何倍入れればこんなにも……」
「甘いものは頭の回転をよくするというではないか」
「そうですけど……」

ずれる黒ふち眼鏡を直しながら、屈んでいた細い体を起こし立ち上がる。無駄に背が高い。これで少し肉付きがよく、少し変わっていても普通に生活しているならまともなちゃんとした人生を営めるはずだ……たぶん。まあそんなこと言ったって彼にはその実行力意識も能力も努力もする気などはなっからないでしょうけど。

「あの、今日って流星群の日なんですよね？」

尻もちを着いた私に手を差し伸べるわけでもなく、彼は何事もなかったかのように天を仰いでいた。

ちなみに私の質問に答えは返ってこない。わかってましたけど。彼は至極自分勝手で興味ないことなんか右耳から入って左耳に抜けるか目か鼻か口からかに抜けて、神経から大脳まで届くことがないってわかってましたけど。でも話しかけているのに答えてもらえないのは、やっぱり少し悲しいというかむなしい。けれど、いちいちそんなことで落ち込んでたら彼とまともな人間関係が築けないことなど了承済みなので、あきらめる。

彼に次いで私もつられるように頭を上げて空を見上げる。

夜空に広がる満天に輝く星々――私にはそれが無限の奇跡、可能性を感じることができる。ちっぽけに思えるこの時間がなによりも、不思議で何でもできる勇気をくれる。そんな星々に魅了された一人

だ。

「――そうだ。道が開く日だ」

ぼそっと零した彼の言葉を聞くことはなかった。背を向けて再び望遠鏡をのぞいていた私は、ん？　と彼に振り向いてしばらく考え込んでからもとの体勢に戻った。気のせいだろう。

（……それにしても、ここに来てからもう半年になるんだな）

人里離れた山奥のさらに奥地の地形が飛び出た丘の頂上にある天体観察塔――ここに通い始めるようになったのはちょうど六か月ぐらいの月日が経過した。そう、あの時は干からびるぐらいに熱い灼熱の太陽が照りついていたっけな。そして私は声を掛けてしまった。自宅前の公園唯一のベンチで伸びていた彼に、怪しいとわかっていてもバテている彼にいかにも『私、心配をしています』という装いで、胸を疼いてやまない好奇心を実行してみなければいられなかった。

（後悔先に立たずとはこのことなんだろうな……）

望遠鏡をいろいろな角度にずらしながらピンポイントの位置を探

して動かしながら、ふとあの時の記憶がよみがえった。彼と私の出会い。それは私の悪戯心から始まった。

『大丈夫ですか？』
『……くれ、水をくれ』

スーパーに買出しを終えた帰り道。公園を近道がてらに横断しようとして入ったが、猛暑の暑さにやられて木陰で一休みしているといつもなら無人の公園内に人影があった。見るからに白衣を着た怪しい男の姿が。

ちょうど木陰に入っているベンチで彼は腕を頭に当てて、ぜいぜいして苦しそうだった。ほっとくこともできたが私の性分上見捨てることもできず、かといって片手にぶら下げている買い物袋に入っている飲料水を分けてあげるだけじゃなんだかつまらないと思った私は、この時何を思ったのか飲料水のペットボトルを袋から取らずに弟に買っていくはずだった炭酸飲料のラムネを彼に手渡すことにした。それもちょっと細工（いたずら）を施したラムネを。

『あの……。もしよかったら、これ』
『遠慮なく頂こう』

彼の片手にラムネのペットボトルを突き出した途端、彼はぬくっとベンチから起き上がり、がっしりとペットボトルを握ると奪うようにして私から掠め取った。

急な起き上がりに驚いた私はベンチから後ずさり地面に尻もちをついて、呆気に彼を見た。彼はすでにペットボトルの蓋に手を掛けて、ひねった。次の瞬間――

『うわぁああ――！』

案の定、私が狙った通りの現象が起きる。炭酸飲料の爆発。

しかもそれは加減を知らなかった。彼の手にはもちろんのこと、それは本当の火山噴火の如く。あっ、と私が声を出した時には彼の顔に直撃してその衝撃にペットボトルを放した彼は衣服にまで汚すことになった。私はそこまで予想していたわけでなく、その場を立ち去ろうとした。だけど、

『――しい。……なんて素晴らしい、代物なのだ！　これこそ私が求めていた相手を二回も不快にさせる。裏に裏を敷いた最高の悪仕掛け。君、何処へ行く。待ちたまえ！』

ぐいっと掴まれた腕、逃げ遅れた私、迫りくる髭もじゃ不審者――どうする私！？

『何故現実逃避をしようとする。私たちは今素晴らしい運命の出会いしたのだ』

『は？』

『よって、君はこれから私の管轄下に行動を許すことにしよう』

さっきまでバテていた人とは思えないほどピンピンとした声だ。まさか、ずべて演技なんてことじゃ――！　だがすぐに掴まれていた腕が放された。『私の管轄下』といった時点で誘拐じみた宣言？　みたいなことを言っといて彼は誘拐する気はないのか。私、逃げちゃいますよ。ええ、逃げますとも。

『君、星に興味にある…かね』

『……。ええ、まあ……好きですよ』

トンチンカンの質問が私の足を止めた。振り返ると、彼はこちらを見ることもなく再び仰向けにただベンチに寝ころんでいた。

そのまま彼との間に沈黙が流れる。

この機会を逃すまいとその場を離れようとした時、彼は強く腕を引いてきた。出し損なった悲鳴。私は掴まれた腕を見た後、視線を彼の方に向けた。

『私と星の観察日記を作成しないか？』

数秒後、悲鳴。自分で出したにもかかわらず、その大きさに驚い

た。途端、口元に彼の手が伸びてきて、そのまま口を塞がれた。

『待ってくれっ！　君は私に選ばれた。いや、君は最高の人柱になるに決まっている。あとは星を眺めていればいいだけだ』

もがく。もがく。もがいて逃げようと試みる。ダメだ。大の男に力が敵うはずがないのだ。そして目蓋が重くなった。多分、酸欠になって気を失い、気絶。その後のことは覚えていない。

次に目が覚めた時には《変人奇人天体観察塔》、ここにいたのだった。

彼によって家とは遠く離れた場所に連れてこられた私は理解不能な状況から素早く頭を働かせて次なる展開を予想した。誘拐。身代金。殺人。暴行――さまざまな可能性を想像し身構えた。しかし目覚めてから初めの彼のひと言で私の想像は見事にを砕かれた。

『君は私の助手だ』

それからこの半年間、《変人奇人天体観察塔》での未知なる彼という謎の生命体の飼育と及び雑務（パシリ）を全う（助手宣言されてからあの後、すんなりと家に帰してもらい。はじめは警戒しながらも彼のもとに通っていたが億劫になってすっぽかしていると、学校帰りに校門前でうろつくようになり、それが嫌でそれからずっと通っている。そして、今では友達感覚で付き合っている私がいる……。なんだか嬉しくないけど。というか冬休みで単に暇なので通いっぱなしであ

るのだが……）する羽目と成った。

（あの時は焦ったよ。誘拐されて身代金なんて要ー求された日には私の家は破産だ。よかった。よかった。変人だけど犯罪人じゃなくて）

経営困難、倒産危機状態だった我が父の会社――それが半年前。今は地道に成果を上げて不景気を乗り越えているらしい。娘としては嬉しい限りだ。

いまだに謎深き彼を横目で見た。すると目が合ってしまう。

「綺麗だな」

「……」

おかしい。おかしすぎる。彼が、彼が美を口走るなどとありえない。幻聴？　そうきっと幻聴なのだ。そうでなければ今すぐ雹が降る、槍が降る、世界が終る！

「そ、そういえば、」

「暇なお前は私と世界を裏切り一緒に世界を救おう。自分の人生を捨てよう――なに、心配はいらない。面倒は私が見てやる」

異様な雰囲気に無理やり話題を変えて調子を取り戻そうとするが

割り込まれた。呆然として「は？」と口から零れる。意味がわからん！　……。世界を裏切り？　世界を救おう？　人生を捨てよう？

何、彼は私に『終焉まじかの世界を裏切りと見せかけて本当は正義の道を貫くエージェント』にでもなれと…！？　それとも愛の欠片も見えない熱愛表現！？　まさか、いや彼に限ってそれはない。彼の頭にズバ抜けた変人辞書はあるが一般恋愛表現辞書は持ち合わせていないはずだ。仮にもしそれが変人辞書の告白項目にそんな理解不明な告白が書き記されていいたら、まあ間違えなくそうなのだろうけど――。

奇人極まりない彼の真面目なはた迷惑な誘い？　もしくは告白？に私は痛ましい視線を送り続けた。

「どうした？」

「いえ、今日も飛び抜け不可解なオモシロ珍発言に私はどう回答したらよいかと迷いに迷って、行き止まり状態でして……」

嫌み悩みを含めて思ったままに口を開いた私。私の頭の回路は混乱。思考停止状態に差し掛かっていた。

「問題ない。私に任せておけばいい」

今の言葉を切り取って一般恋愛表現辞書からの抜選で駆け落ち前の男女間で「でも、わたし……」と続けた駆け落ちに不安を募らせる彼女にその言葉を繋げたのであれば、素晴らしくそれも見事に彼女の心を射止め、一気に恋という盲目に彼女を落とすに違いない。

「というわけだ。――星も傾き始めたな。よし、行こう」

どういうわけだ！　そうこうしている内に私の手首を掴んで彼は屋上の出入り口の扉とは反対側へと歩き始めた。

「えっと、そっちって――」

――何もないですよね？

「飛ぶから、歯を食いしばったほうがいい。私はあまりこれに慣れてないのでな」

目の前には点々と光る乏しい夜景が広がる。風が下から吹き荒れて、二人の前髪を揺らした。

首を出して下を見れば荒地とかしてる地面が見える。次の瞬間、屋上を囲う低いコンクリートのブロックの場所にひょいっと持ち上げられた。彼もそこに上がる。視線を上へとずらせば「大丈夫だ」と言われた。というかなんてところに立っているんですか自分たちは……まさか、飛び降りるつもりですか――！？

私が口走ろうとした時、既に時遅し。私と彼の体を支える足たちは本来踏んでいるはずの地を踏まず、空中へと踏み込んだ。

一瞬の出来事。だが私にとってそれは数十秒いや何分のことかのように繊細にはっきりと感じられた。屋上から落ちるという無謀で危険な体験をこの時――それは足場のないジェットコースターが湾曲線を降下するよりも、準備もなしに垂直的に急降下するほうが何倍も怖いと誰に聞いても答える。だって速さと気持ちが違うんだから。

「手を放してはならない。私も万全な状況じゃないからな」

手を放すな、てか私、掴まれてますから。もはやこの時、私は理解の範疇を超え過ぎて正常じゃなかったのかもしれない。抵抗する、ということ自体を忘れていた。

「……え、うん。……は？　えぇえええええーーーー」

ただ彼の言葉に頷き、そして私は暗黒の闇に落ちていった。

第1章「棺桶姫の誕生」

「滑稽な発言は止してもらおう。棺桶だと？　貴様らの王は相当俺を墓送りにしたいらしいな」

彼は嘲るように鼻で笑い、スッと手を伸ばすと同時に目を壁隅に仕える従士たちへと配った。その合図は敵国の使者たちの死を表す。

「や、やめてくれっ」

場違いな二人を壁際に追い詰め、今にでも斬りかかりそうな彼らは王直属の護衛官に選抜された優秀な配下――情の念はありはしない。感情のない傀儡そうしたのは紛れもなく隣に威厳と脅威を放ち、詰まらなそうに一部始終を見届ける王。この場のすべての絶対権限を握るのは彼一人だけなのである。

王座の脇に仕えていたラルムはチラと王を見た。そして即位して間もない若い王の下した冷酷な命令に対してにわかに口元を緩めた。

（我が王ながら手厳しい）

少し苦笑に満ちた笑い、その中には尊敬の意も含まれている。我

が主君は彼以外には考えられない。

ラルムは視線をただっ広い空間の中央へと向けた。そこには人ひとり入るか入らないかの真っ黒な不気味な棺桶が置かれている。何故、棺桶を送ってきたのか？　敵国の意図は何なのか？　ラルムは切れ者と呼ばれ、王にその頭脳と才能を買われ王の片腕とも言われる側近になった。相手国が棺桶を送ってきた意図が果たして単なる『王を棺桶送りに』と、いう憎悪の念を込めた嫌がらせなのか。それとも他に思惑があるのか……。

ラルムは表情には出さないものの米神を揉みあらゆる可能性を引き出そうとするが、見当もつかない。珍な贈り物ゆえ前例もなく、『棺桶を送る』という行為事態が異常で、あちらの国の思惑がはっきりとではなく漠然としているので埒が明かない。これといった確信にたどり着けないのだ。我が主君も主君で胸に秘めた考えを読めるわけでもなく、遥か遠くにいる隣国の王の考えなどこんな意味不明な贈り物を前触れもなく送ってくるのだから、たとえ国を担う側近の自分であろうが見通しがつかないし、会ってもいなのだだからわかる筈もない。できるのは、霧の中で探しものをするような的中するともわからぬ底抜け推測だけだ。

（しかしあの忌々しい豚王も意味不明な謎掛けをしてくれたものだ。機嫌取りなどに棺桶など普通は送ってくるものなのか……？）

ラルムは遠縁でしか姿を拝見したことはないが、醜い体型をしていたと記憶している。どっぷりとした脂ののった豚のような、しかもそれゆえ両脇には騎士が仕え、行動する際に支えられて移動しているのが遠くからでもはっきりと見えた。豚みたいな王、だから豚

王と自分の中では秘かにいい渾名(あだな)を付けたものだと称賛している。

ただっ広い王謁見の間に壁際に控える多数の護衛官の中の数人の傀儡たちは壁見事に血を被り、隅の床には二体の死体が転がっている。隣国の使者たちは無残にも亡きものとなった。

「始末しておけ」

王の心無い言葉が冷たく響いた。

これといって誰に向けられたものでがないがその場に仕えていた数名の者が手際よく動く。まるですでに予想していたかのように無駄のない行動に不気味さを感じるが、もはやこの場にいる誰もは了承済みだ。こんな日常茶飯事のことにいちいち驚き悲鳴をあげていたら命が幾つあっても足りやしない。

『アヴェルス国は王がすべての律だ』と、うまいことを言った奴がいたのを思い出した。逆らうものではない、彼はそう言いたかったのだろう。けれどその彼も今や亡き者となった身、彼も王にいいように利用されそして捨てられ、消えてった。王が一体何を目指し、何故そこまで残酷で無残なやり方を好むのかわからない。そう、誰にだってわからないことなのだ。

「無駄な時間だったな。目障りな棺桶(アレ)を処分しろ」

「わかりました」

不愉快そうに言うと、王座を立った彼は中央の棺桶を見下ろしたあと、ぐるりと辺り全体を見渡した。

「ラルム」

「エシェックなら朝早々に情報収集といってアルカンシエルに出向いています。剣の打ち合いならアトゥあたりが適任でしょう」
「あの新米か……殺しては勿体無い。戻ってきたら真夜中だろうが自室によこせ」
「そう伝えておきましょう」

エシェックはもう一人の側近、そして王直属の騎士団の団長を兼ている。そしてアトゥは最少年で王直属の騎士団に入団した新米騎士だ。王直属の騎士団というのは、アトモスフェール帝国の十二窮騎士団を考慮して設置した国中の凄腕の兵士を集めた組織。そして今年になって入団したアトゥは腕も相当で、王のお気に入りでもあった。

「後はお前に任せたぞ」

立ち去る際に見えた流麗で整ったその顔は、いつも冷たい氷のような表情に足して不機嫌の悪さが見て取れた。きっと今宵はいろんな意味で荒れるだろう。

ラルムは胸元から絡繰(カラクリ)物時計を取り出す。複雑な構造が施されて

いるそれの中央には、巧みな小細工がされている綺麗な硝子でできた秒針が一定のリズムで打っている――針は思っていたよりも時を刻んでいた。

「王は自室へと退室なされた。これからは側近の私が取り仕切る」

大きなため息を付いてから、王がいなくなりざわめき始めた謁見の間を仕切ろうと声を張り上げた。

2話

揺れる、揺れる。まるで揺り籠で眠る赤子の体験をそのまま再現したようなそんな揺れ。だけど本来なら母親のお腹の中にいるような感覚を似せて揺らす籠は、安心できるはず。そう安心できるはず。

私、正木（まさき）　和架（のどか）は世にも奇妙な貴重な体験を今現在進行形で過ごしていた。

真っ暗な世界、漆黒の闇――その暗黒の闇にいくつかの細い光が差し込んだのは、はらはらするような乱暴な浮遊感がなくなったのと同時のことだった。体の全神経を集中し張り巡らせ、あらゆる感覚器官を働かせる。

「真っ暗だ。ねえ、ここどこ……？」

そして再び動き始める。迫る恐怖に耐えながらこの揺れを感じていた。

「うわっ！」

大きく傾いたと同時に急に体が反られ、硬い何かに全身が打ち当った。思うに、私は何か箱のような物に入っているらしい。それも

人間ひとり入るのがやっとの狭い空間に……。

人間、仮説を立てることは大事なことだ。まずどうして私はこんな状態になってしまったのか。何故？　どうして？　そうしているうちにほら、色々なことが思い浮かぶ。

・いつものように《変人奇人天体観察塔》に来て助手らしきこと（→雑用（パシリ））を行い。

・流星群が見えるということで、今日はいつも通りの時刻に家に帰らないで塔の屋上に出る。

・夜空を観察。

・奇天烈変人星オタクが登場。

・彼の珍発言をいつもの如く（心の中で）突っ込む。

・そして、……。

あれ？　私、記憶が吹っ飛んだのだろうか。いや、おかしい。……うんうん、実際は覚えてる。覚えてるよ。

――彼とともに屋上から飛び降りた。

ダンっ！！　大きな音が響く。

和架（のどか）は無意識に起き上がろうとして、硬い何かにオデコをぶつけた。声にならない悲鳴を上げて、両手をオデコを何度もさすり、痛みを和らげようと揉んだ。

（でも屋上から飛び降りたのが事実だとすれば、私は……死んだってこと？）

嘘だ！　再び起き上がろうとする直前で、和架はぐっと我慢して耐えた。痛い思いはしたくない。

（彼とともに屋上から飛び降りた――では、私はあのまま死んでしまったということ……？　ということは浮遊霊状態突入中！？　ここは天の召す間の前兆か何か――っ？）

グジャグチャ状態の思考回路をさらに悪化させて、ありとあらゆる可能性を引き出そうと考えを巡らせた。

ええ、いつかこうなるのではないかと常日頃から、うんうん、彼と出会って気絶して、次に目を開けた瞬間のあの意味不な一声を聞いたあの時から薄々感じ取っていましたとも。でもの薄々感じ取っていたわけであって、まさかこんなことになるとまでは予想してなかったけど……まさか道連れ自殺をしてくれるとは……！！　ああ、神様。私を天に導きたまえ――

（早まった考えはダメ。落ち着くんだ自分！）

狭い空間での深い呼吸はとても息苦しく感じる。けれど落ち着かせるために、和架は鼻からおもいっきり吸い込み口から息を吐いた。そしてあることに気づく。

（……家の物置のような臭いがする）

微かだが何年も放置状態の物置独特のカビやら埃やらの混合した臭いが鼻につく。

仮にさっき立てた“天に召す前の浮遊霊突入説”を持ってきて、果たして幽霊となった私に視覚はさて置き、嗅覚までもが働くだろうか？　まあ、初めて死んだわけなので確信というものわはないが。それにオデコをぶつけたときもそうだが――体に感覚がある。

（私……生きてる？）

そしたらそれで万々歳だ。人間生きていることに価値がある。いいこと言ったぞ自分。

自身の意識が覚醒してからというもの、何もすることができない状況に焦燥感を駆られながらも、この状態をなんとかしようと格闘している。至近距離にある壁は身体を四面に囲んでおり、頻（しき）りに叩いてみたり、大声で助けを叫んでみたりするが悲しくも反応も応答もない。

「……」

息苦しい。そう思った時、私は背を丸めて口元に手を添える。酸素濃度が薄くなっているのかは定かではないが、とにかく息をするのが困難であることには違いなかった。それが思い込みだとしても。

（私は閉所恐怖症なんですけど！）

まあ勝手な妄想、言ってみる。実際はそんな症状はない、はず。けれど心の中で呟き、焦りを加速させる。

――こうなったらヤケクソだね。

もがくように両脇の堅い壁を拳で何度も叩きつけ、手の次は足が出る。上側に足が伸びて強く壁に当たった時、手ごたえがあった。一瞬だが、上が浮いた気がしたのだ。

逸（はや）る気持ちを抑えて、もう一度、今度は両腕で顔上のあたりから慎重に押した。ずっしりとした重みが降り掛かってくる。きついが耐えた。荒くなる呼吸を堪えて、和架は渾身の力を振り絞った。

「――っ」

燦々（さんさん）と照り当たる眩（まばゆ）い光に、目が奪われる。持ち上げたものが手から離れてから何秒か後に、下の方からドシンと鈍く大きな音が耳を貫く。なんだ！？　と、仰向けになっていた身を起こすと、さらに濃くなった光に目をやられた。

「――ん、」

暗闇からの光は殺人的な眩しさで、目元から額へと手を翳（かざ）し移して、徐々に光に慣れさせていく。

「はあー。……苦しかった、まったく」

誰ですか、こんなところに閉じ込めたのは。私、あと少しで死ぬところでしたんですけど。こんなイジメしちゃだめだって、ご両親はいったいどんな教育をしてきたんですか！　……はあー、疲れた。長期の運動不足は滅入るよまったく。

彼女は完全に視覚を取り戻すと、状況把握のために周囲を見渡した。

地上というある一定位置にいるはずの私、いつもより空との距離が近い気がするのは錯覚ではない。いつもよりも自分がいる現在位置は随分と高く、眺めがよい。

きれいに澄み切り、淀み一つありはしない晴天。蝶々たちが舞うようにたゆたう。視線を下げれば緑多くある景色、視界の角度を1

８０度変えれば――。

「へ？」

後ろに向けていた肩、首を一端もとに戻して、首を傾けて考え込む。次には身体ごと向きを変えていた。

ありえない。いや、おかしいだろう。巨大な建造物がまるでビッグウェーブの如くに存在し、テレビジョンや海外旅行ガイドぐらいでしか見たことないような立派な、それも世界遺産に認定されているような代物――それが目の前に、堂々と建って私を見下ろしている。

「う、寒い」

清々しい風が肌に当たり、鳥肌が立つ。身震いするような寒さに、反射的に自信を抱き寄せた。腕をさすりながら体温を上げていく。そしてピタリとその動きを止めた。

何度目か瞬き、引き攣る笑い、唖然。変わらぬ風景。

――――――・・・……？？？

「――どうして、お、お城……が？」

とっさに視線を外したのは、ワケがわからず、理解不能だったから。けれど驚くべきことはそれだけじゃなかった。

「……え、か、棺桶？」

縁に手を掛けた刹那、あるものが記憶から甦り、それがピッタリと当てはまる。自身が入っている石造りの長方形の入れ物、両端は多角になっており、人ひとり入るのがやっとである。どこをどうみても、想像するそれだった。状況が飲み込めない。

「――私、蘇ったんだ」

起死回生。わーい！　すごい。生き返った……じゃないっ！　私は本当に死んでいたというのか――？！

「……一体ゼッタイ何なんだ。あ、」

頭がグルグル状態で混乱しているのもつかの間――なぜか知らんがグラグラと棺桶ごと揺れ始めた。棺桶の下を覗けば、今立たされている事態が反射的な速さで、視覚を通って大脳へと伝達される。積み上げられた木材の天辺、そこに棺桶に入る私。落ちる、そう思った時にはときすでに遅し。バランスを取ろうと崩れ落ちる方向と、

逆側に這うようにして体を傾斜の上へともって行くが、ダメだった。

「ぎゃぁあああああああ――――――っっ！！！」

そうそれはまるでジェンガが崩れるようだった。雪崩の中に雪舟（ソリ）を走らせるような感覚を数十秒間、私は体験した。いや、雪舟ではない。もっと頑丈な棺桶で。ヘルメットもなく。アブナイ危険な貴重な体験を――。

「し、死ぬかと思ったー」

正木和架、無事大地に帰還しました。敬礼。ハリウッド映画のスタントマンもビックリ――え、もっと危険な綱渡りもするって？すみません。でも、あいにく私はスタントマンじゃなので。

数十メートル先にいったところでスペースシャト、…いや、棺桶は休止することに成功した。後ろ（バック）を見てみれば、手入れのされている芝生が削れて、土が無残にも露になっている。酷い爪あとが残った。

「よし、今のうちに……うん、逃げよう」

見つかって、庭を汚した弁償金の支払いの請求を要求される前に……。

――和架は兎(うさぎ)が野原を駆けるごとく、そそくさと立ち去ったのであった。

▼△▼△▼△▼△

「ロビュスト陛下は機嫌が優れない様子である。今日は必要以上に気を使ってくれ」

片目眼鏡のズレを直しながらライムは筆頭女中に念を押した。王の世話係は信用のある限られた者だけ、事情もよくわかっていると思うが下手をすれば死人が出かねない。これ以上女中が減れば、城中にも支障が出るのだ。我々官僚の食事や身の回りの世話など、城下に住む料理人や娘などを雇えば何とでもなる。が、他国からの来賓や高貴の身分を招くとなると、教養された礼儀ある女中が必要となるのだ。相手が機嫌を損ねて、国問題に発展しないとも限らない。そうならぬ様にも注意しなければ。

「では失礼する」

筆頭女中が頷くのを確認すると、ラルムは彼女とは反対方向に踵(きびす)を返した。
繋がる回廊では女中たちがせかせかと行き交う。本来、こんな場所に来る身分ではないが配下の言付けだけでは、職業柄心配になるのだ。何でも自分がしなければ納得できない。もしかしたら己の性分からくるものかもしれない。
中庭の周囲に巡らされた、回廊を進む。ここから見える中庭の景色は素晴らしい。何より噴水の何せ王が愛顧(あいこ)する庭師に一切を任せてある。それも各国でも名高い腕ある庭師にだ。
しばらく歩くと裏庭に出た。そこをさらに進むと、先刻に手配した他国から送られてきた不吉な贈り物を焼却(しょうきゃく)するために設置したものが見えてくる、はずだった。
ライムはその足を止めた。そして目の前の光景に眉をひそめる。やや考えた後、すぐさまその方向へと急ぎ足で近づいていった。

「……」

じっとその光景を見入った。……最悪だ。
棺桶を燃えやすくするために用意した材木が見事に崩れて、散乱している。つりあいよく積み重ねたはずなのだが、強風で倒れたのか？　そんな考えが頭を過(よぎ)った。だが変だ。はたして木材でできた棺桶があれほど遠くまで滑り落ちるだろうか。
広大な敷地を持つ庭のほとんどは芝生が敷かれている。そのあちらこちらに噴水だったり、色鮮やかな花や草木が剪定(せんてい)を終えて素晴らしい風景を作り上げられている。裏庭は飾る必要もないので手入れはさほど熱心にされていない。だが誰がどうみようがその光景は

異質としかいえないものだった。散らばった木材、棺桶とその蓋(ふた)の距離は遠く離れているし、仮に風の仕業だとしてやはりどこかおかしい。

ふと、ラルムは棺桶を運ぶ際に小耳にはさんだ事を思い出した。

『なあ、コレ重くないか？』
『ああ。だな』
『開かないのか…？』
『さあ、さっき誰かが試したみたいだが、錆びてるかなんかで開かなかったらしい』
『でも、気にらないか？　……重いし』
『じゃあ、お前が開けてみろよ。俺はゴメンだね。死体が入っているかもしれないもんなんか』
『……だよな』

王謁見の間で起きた出来事を知らない彼らは、どんな意図で送られてきたものなのか見当もつかぬことであろう。王は不快の方向で取ったが……。己の立場上、始末しろと言われたから実行する。それしか考えなかった。

――それにその時はそんな他愛もない会話など大して気にかけなかったのだ。

はっ、とラルムは棺桶の方へ駆け寄った。中には何も入っていなかった。横から持ち上げてみる。

「……」

軽々と持ちあがる。蓋も含めてもそれほど重くないはずだ。だが、大の男が二人掛かりで持って“重い”ということは何かが入っていたのだ。そう、その何かが……。嫌な予感がする。それも最高に。

胸元にぶら下がる時計を握りしめて、それに力を加える。何か起きてからじゃ遅い。たとえ、自分の思い過ごしだとしても。

「……ロビュスト陛下には一応話を通しておくか」

そう独りごちて彼はその場を離れたのだった。

3話

城内をさまよっていると、小さいが立派な厩舎に出た。

ひょこり、顔を出して中の様子を窺(うかが)う。人がいないのを確認すると、そのまま足を踏み入れた。固められた土、奥には高く積み上げられた藁(わら)がある。

「うわー。馬だ」

ヒヒィーンという鳴き声がその場に響いた。もしかしたら自分の存在に気づいて驚いたのかも。馬なんてテレビでしか観たことないよ。すごいや。

和架はその馬と木で区切られたところまで近寄ってみる。中には大きな馬が一頭だけいた。全体のすべてがの毛が真っ黒で気品に溢れている。その迫力に目を奪われていると、漆黒の馬は再び雄叫びをあげた。

「……う、ぎゃあ！」

びっくりして尻もちをついた。急に鳴くと驚くじゃないか。

視線を上げて見れば、馬は鼻息を荒くして蹄(ひづめ)を掻き立てている。こちらを警戒しているのか、本来ならまん丸とした瞳(め)（↑少なくと

も動物テレビで出演していた馬は愛嬌(あいきょう)があっておとなしかったハズ）は少しつり上がり睨んでいるように思えるのは思い過ごしだけではないだろう。名前とかあるんだろうか？

近くにいると太くて長い脚が飛んできそうなので、距離を置くことにする。尻もちから四つん這いになって、馬と反対側にある藁の山の方に寄る。小丘になっている藁の上に寄りかかると、ふわふわして気持ちがいい。そのまま体を沈めて、軽く伸びをした後に天井を見上げた。

「……それにしてもここは何処なんだろうか？」

少なくとも、あの奇天烈変人星オタクのせいで私はトンデモナイ状況下にあることには違いないとは分かっているものの……。

（……この混沌のカオスの世界を如何せんと？）

私の頭ワールドは混乱状態。おかしくなりそうだ。そして何より、現段階の状況把握と次の段階に移行するための手段を持ち合わせていないのだ。赴(おもむ)くままに歩いていたら、こんなところに来てしまったが。

「ああ、最悪だ……」

こちらとしては、夢落ちで終わらせたい。夢ならば普通痛みはな

いしないハズだし、本当に死ぬこともないだろうから。和架は尻に手を伸ばして軽くさする。棺桶雪崩事件後プラスさっきの尻もちのせいで悪化をたどっている尻の痛み。ズキズキとする尻にはもしかしたら痣ができているかもしれない。

「ん……」

なんだか眠くなってきたな。夢の中でも眠たくなるものなのだろうか…？　など、考えて腕を頭に回した。そういえば、長時間に渡って神経を使ったせいか、疲れた気がする。体が鬱々とし始める。視界がぼやけて、目が重たくなる。少しだけ、そう呟いてから和架が眠むるのにはそう時間はかからなかった。

▼△▼△▼△▼△

肌寒さを感じて身を丸くする。パサパサした肌触りの何かを寄せ集めて、寒さを少しでも凌(しの)ごうとした。けれどそれだえでは寒さは和らぐことはなく、凍てつく寒さはには耐えられなかった。

少女はパチリと目を覚ます。意識がはっきりし、記憶が蘇ってくる。

「やっぱり夢じゃないのか…？」

溜め息のように近い、大きな深呼吸をして視線を周囲に巡らせる。馬の鼻息の音と独特な臭いがする。遠くに無数の灯りがチラついているのに気が付くと、いくらか楽になった体を起こして立ち上がった。鈍い手足に小運動を促してから、小さな灯りを頼りに厩舎を出た。

こそこそと注意深く辺りを見渡しながら、少女は足を進める。人の気配はなく、静かだ。あんなに明るかったのに、夜になっているということは長らくあの場所で眠っていたのだろう。

いくつもの篝火（かがりび）が一定の間隔で設置されている。灯りにつられて建物側へと近づけば、長い外廊下が続いていた。そこを小走りで、柱に隠れながら城とは別離した建物の方向へと進んでいく。行き止まりまで来ると、古びた扉があった。

――ギィイイ

ゆっくりと音を立てずに慎重に。腰を屈めて扉から顔を出す。大丈夫、誰もいない。中に入れば、いくらかか風が当たらない分暖かかった。

「暗いな……」

声が反響した。外廊下にはずらりと灯りがあったのだがこの建物に一つもありはしない。進む頼りは、窓から差し込む外の灯りだけだ。

床にはあまり人の出入りがないのか埃が溜まっている。歩くたびに埃が舞う。

「ゴ、ゴホンッ……それにしてもここはヒドイ」

隅に積み重ねられるようにして置物やら装飾品やらがごろごろと乱雑に置いてある。頭上を見上げれば、天井が見えないぐらい高かった。塔のようなつくりの建物で螺旋階段が端から始まり上へとのびている。上がってみるか？　埃臭いのも勘弁だし……。

螺旋階段の方へスタスタと行って、手摺（てすり）に手を伸ばし階段に足を掛けた次の瞬間、

――ちょうど真正面の階段の上から何かが光を発して風を切り、物凄い速さで階段に掛けかけた別の足からそう遠くない場所に突き刺さった。鈍い音が大きく響く。

視線はそれを追って背後を振り向く。その何かが何であったのか一目でわかる。和架は目を見開いて驚き、それをじっと直視した。顔が引きつる。あ、ありえない。

「……け、剣？　でも、ど、どうして……？？」

両手で持つのも困難そうな大きな剣。それが見事に自身の近くに刺さっている。飛んできた方向、自分が上ろうとしていた階段の真正面へと、視線はおのずと上がる。

「……」

螺旋階段の少し弧の場所にいたのは男の人だった。顔は影になって見えないが、銀髪の髪が印象的だ。全身を覆う真っ黒な外套を靡かせ、彼は私と相当離れている距離を文字通りに飛んできた。それも目にも止まらぬ速さで――

和架が唖然と固まって、自身に行動を促しかけた時には彼が目の前にいて自分は身動きが取れない状況になっていた。そして命が危険な最悪な状況にも……。

「俺は今、胸クソ機嫌が悪い。それも一日最悪だ」

刃物を私の首筋に添えて、彼は低く言った。

そんなこと私に言われても困るんですけど、と相手に言ってやりたいがそんな余裕がない。背後に立つ彼の吐息が耳元をかすめる。震えが止まらない。

『――もし、不審者が刃物で襲いかかってきたら皆さんはどうしますか？』

そういえば小学校の頃にわざわざ警察の方々を講師を招いた護身術などの講習会があったのを覚えている。その催しでの会話がフラッシュバックとして甦(よみがえ)ってくる。あれはまだ低学年の時だったと記憶している。

『はーい。はい、はい、はーい！』
『じゃあ、そこのあなた』

女性の警察官の人が指をさして、手を挙げてうるさく『はい』を連呼する一人を指名した。それは体育座りをして座っている私の隣の奴だった。男の子は指名されたことに満足し、満面の笑みで答えた。

『大声を上げて、走って逃げます！』

簡単だね、といったぐあいに彼はカッコよく言いきった。

『正解です。はい、よくできましたねー』

女性のその言葉と同時に、その場に大袈裟な拍手が鳴り響いた。

『そして、走って大声で近くにいうる大人たちに助けを求めましょう。はい、じゃあ正解してくれた彼には記念品を――ありがとう、座っていいですよ』

相方のもう一人の警察官の女性が男の子に正解した記念に何かを手渡している。私に自慢するかのように貰った何かを男の子は見せつけてきたのを今でも覚えている。それはキーホルダーだった。赤いワンピースを着た女の子が両手を口元に当てて叫んでいるキーホルダー。その上には縁付きで、『たすけてー』と書いてあった。

（あれはこうなる前の対策であって、私もう手遅れなんですけど……。私は一体どうすればいいですか？　叫んでみますか）

ひんやりとしたものが背筋に流れた。もし自分が、後ろにいるコイツの『胸クソ機嫌が悪い』せいで殺されたらたまったもんじゃない。もしそうなったら、後世末まで怨むぞ、私は。

静寂が恐れを盛り上げる。彼は不機嫌宣言をしてから黙りきったままだ。どうしたんだろう、と刃物とは反対側に首をずらして彼の顔を見上げようと頭を上げた。

両者の目が合った。

和架はすぐさま気まずくなって視線をはずした。一瞬だけだったか、顔を見ることができた。あれがいわゆる美形？　とでも言うものなのか。私は自分で言うのも何んだが、稀なる美形とかカッコいいとかそういった類(たぐい)にめっぽう疎(うと)い上に興味がないのだが……。

（うわー。……鳥肌が立った）

ぶわーと全身の毛が逆立った様な気がした。完璧な顔、そんな言葉が彼には相応しいと思った。少し血色が悪かった気がするが……。まあ、それはさて置き。彼の瞳の色は鮮やかな深紅色だった。私は生まれてこの方初めて着用した人を生で目にした。お洒落(しゃれ)はとうとうここまで来たか。指輪に腕輪に首飾(ネックレス)りにピアス、刺青(タトゥー)、そして

――カラーコンタクト

それに外套(マント)というコスプレーションときた。お城といい、馬といい、見えなかったが外套の下は王子様衣装でも着ているとでもいうのだろうか？　いや、違った。魔王様、衣裳だった。

「死にたくなければ黙っていろ」

新たに刃物を持ち入れられて、和架はゴクリと唾を飲み込むと、静かに頷いた。今は従うしかない。

（誰かこの成りきりコスプレーヤーさんを止めてぇええ――！！）

そう心の中で叫びながらも、首に刃物を突きつけられたままの体勢で、彼女は彼によって何処とも知れぬところへと連行されていったのだった。果たして彼女の運命はいかに。

4話

俺は最高潮に機嫌が悪い。それは今朝の目覚めから始まったのであった。

『へ、陛下……申し訳、ございません。ただ今、』

本来壁際の低い戸棚に飾られているはずの花瓶があられもない姿で床にあった。花瓶に挿してあった花は束になって絨毯に転がり落ちており、赤い絨毯は割れた花瓶に入っていた水で黒く湿っている。花瓶が床で粉々になっているのを確認した後、寝台の横に置いていた愛用の剣を片手に、鞘から抜き、震える声の方向へと足が進んでいた。

『お、お許しを』

切れ切れ声で女は後ずさる。女の顔は青ざめ、震えている。

『へ、陛下…お許しください、ませ。もうこんなご無礼はいたしま

せんっ。ほ、本当です。どうか、私にお慈悲を……』

お慈悲を求める言葉など無視して、剣を振るった。甲高い悲鳴。鈍い音がしたと同時に、赤い絨毯へさらに赤が加わる。目の前には己が今斬り捨てた女が真っ二つで倒れている。まともに仕えられぬ女など、目障りなだけだ。

剣にこびり付いた赤を払い落す。ふと、視線を隙間の開いている扉へと向ければ、ちょうどそこに手がかかったのを見た。次の瞬間、見知った顔が姿を現す。

『――陛下』

『何用だ、ラルム。手短に言え』

さほど歳の変わらぬ青年は女の死体に一瞬眉をしかめた後、いつもも通りの冷血な感情のない口ぶりで用件だけを述べ始めた。

『アルカンシエル国王からの使者二名が謁見を求めています。いかが致しましょう？』

『…この時期になぜあの国がここへ来る』

アルカンシエル国といえば我が国と同じく、アトモスフェール帝国の傘下にはいっていない独立国だと記憶している。さほど大きな国ではないが小さくもない。ニュアージュとの停戦以降、港の貿易船での輸入輸出での交流はあったものの国同士の交流は盛んではなかったはずだ。アルカンシエル国王とは俺が新しく即位する際に招

いた王位継承の即位式以来会ってもいない。あれから二年の歳月がたった。記憶によると、あの王はその場で斬り捨てたいほどふざけたヤツだったと覚えている。だが歴史はあっちの方がある。何故か知らんが各王国間では歴史が深ければ深いほど、国が大きければ大きいほど主導権を握れるという可笑しな決まりがある。我が国は己で三代目というまだ真新しい国だった。領地は広いが、まだまだ人民が少ないのが難点だ。

『湯浴びをする。お前は先に行って準備をしろ』

こうして俺の一日が始まった。朝の侍女の失態、大広間では他国の使者が持ってきたふざけた“贈り物”――そして、

「苦しい…」

切れ切れの少し高めの声が聞こえた。視線を落とせば、腕の中には今捕えたばかりのネズミが苦しそうに顔を歪めていた。どうやら刃物を持つ腕が首に食い込んで締め付けていたらしい。小さく溜め息を付き、腕の力を抜いてやる。本来ならその場で斬り捨てている相手だ。失神しようが気を失おうが、知ったことではない。

これを見つけたのは、エシェックの帰城を待つのに痺(しび)れを切らして、遠縁に出ようとした矢先のことだった。自室から繋がる秘密の抜け道を通って、今は物置場と化している塔の階段を下りてきた途

中、不審な物音に気がついた。普段城の者はこの場所に足を運ぶことはない。それに例え城の者だとしてもこんな奥の出入りは禁じられているはずだ。無論、そう俺が命じた。

カツン、カツンと二つの足音が当たり反響する。一歩一歩徐々に上へと上がっていく。頭上を見上げれば、目的地まではまだまだある。もと来た道を仕方なく戻ることにしたのは良いが、背の高さに随分と差があるため動きずらい。何故俺がこんなことをしなければならん。

（……いっそうこの場で殺すか？）

そう考えて止めた。面倒だ。これはもしかしたら国際問題に発展しかねない代物なのだ。いくら目障りであろうと、邪魔であろうと正式な他国からの贈り物。それがふざけた入れ物に入っていただろうが。ここで無暗に切り捨てて、戦争などと面倒な地雷は踏みたくもない。致し方ない。

「う、うわ！」

刃物を下へと投げ捨てると、腕の中にいる細っこい体を持ち上げた。先ほどから気にはなっていたが、変な身なりをしている。淡紅色の上着に下に穿（は）いているズボンは異常に短いく、そこから脚肌ではなく黒い生地に包まれた脚が出ていた。それに興味が湧き、触れてみる。つまめば伸びた。変わった素材の生地だ。

「セ、セクハラ……セクシャル ハラスメント！」

意味不明な言葉を発して、急に暴れ始めた。鬱陶しい、やっぱり切り捨てるか？　柄(え)へと手を伸ばしたい衝動を堪える。

「殺すぞ」

ギロッと睨みつければ、花が萎(しお)れたように押し黙まる。それを見逃すまいと、横脇に抱え込んだ。そして早々に階段を進んでいった。

5話

カツン、カツンと階段を上る際に響く音が鼓動とかぶる。なによりその音はこの場に私と彼しかいないことを知らしめていた。その天国の階段じゃなく、地獄へ続く階段、まさに死へのカウントダウンを刻んでいるようである。

「――アルカンシエルの王はどういう意図でお前をこの俺のところに送ってきたのかを答えろ」

数百段ありそうな階段を彼は、和架を見事にガッチリと自身の脇に抱きかかえて上りきった。その扱いはまるで俵(たわら)を運ぶみたいに乱暴で、力加減もなくぎゅうぎゅう絞められる体に悲鳴を上げたが、何か言うようならばその度に彼は「殺すぞ」とか「ここから落とすぞ」とか言って、冗談に聞こえない声音で脅してきた。さすがに命が惜しい、黙る以外に選択肢は残されていなかった。

急に声を出した彼に和架はビクリと体を震わす。……アルカンシエルの王？　何を言っているのかが分からない。何と言ったらいいのか分からず、黙っていると彼は面倒さそうに不機嫌な口調で続けた。

「質問を変える。歳は幾つだ？」

「……あの、」

「さっさと答えろ！」
「ええ、っと、じゅ、十八ですっ！」
「秘蔵の姫と聞いたことがある、それがお前だな？　何故、敵国の城へと来たのか目的を言え」
「……言っている意味がわかりません…」
「無知か」

絶対的な彼の威圧に圧倒された和架は完全に萎縮した。聞きたいことも聞けずに、彼がひとりで納得したところで、会話は終了。階段を上りきった彼は迷うことなく月明かりのない方向、暗闇の方へと歩き出している。そっちに何があるというのだろう。

石壁の大きなアーチを潜(くぐ)った後、何もない広い場所へと出た左右真正面と分かれる三本の道の左側に迷うわず進んだ彼は壁という行き止まりの場所に来てようやくその足を止めた。重力に逆らって首を上げて辺りを見渡す。

「目を瞑(つぶ)れ、さもなければここで切り捨てる」

カチャと鳴った方向に横目を向ければ、彼の手が腰の剣へと触れている。さっき私を狙って投げつけてきたあの剣だ。今までの行動からして、彼なら本当に殺(や)りそうである。
その言葉の次に「うぐっ」という呻き声が和架から上がる。優しさも気遣いもなく、無造作に冷たい地べたに投げ捨てられた和架はわざとらしく見せ付けるように力一杯に目を瞑ってやった。そして「いつまでやっている」という言葉が聞こえてきた。お前が目を瞑れと言ったんだろ！　何なんだ、その無礼すぎる上から目線の態度

！！　そう言ってやりたいが、恐くて言えない。トホホ……。

「――う、うわ！」

せめて睨み付けてやる、と視線を上に持っていった瞬間にぐらりと頭が後ろへと反ると同時に体が浮いた。思考回路が停止後、驚愕する。

（お、お、おひ……お姫様抱っこ――――――っっっ！！！！）

彼の腕が両足と背辺りに回されている。階段を上ったこともそうだが、そんなに飄々とした顔をして自分を運んでいるが重くないのだろうか？　そして何故かなかった道がそこにあることに驚く。彼の体と彼の頭一個分を足した大きさぐらいのポッカリと空いた入り口が出来ている。真っ直ぐに延びたその道の先に明るい部屋が見える。そっちへ進み始めた彼に、どうやってやったの？　と、とっさに出そうになった言葉を唾とともに飲み込んだ。どうせ答えてくれなそうだから。

「だ、暖炉……？」

真っ暗な短い道を抜け出ると、自分たちが出てきた場所を見て和架は声を漏らさずにはいられなかった。暖炉、そうまさしく隠し抜け道――。

きらきらと目を輝かし始めた和架に彼は気付く様子もなく、暖炉から離れて寝台の方へと進みだす。抜け道のことで頭がいっぱいだった和架は、寝台に投げつけられ、彼の次の言葉が降ってくるまで自分が今どんな状況に陥っているのかが把握できていなかった。

「脱げ」

和架は一瞬何を言われたのか分からなかった。

「……だんまりとはいい度胸だな。自分の立場が分かっていないらしい。それとも、あまりにも可愛がられすぎて姫君はこっちまでもが無教養なのか――？」

人を見下したような口調に和架は殴りたい衝動に駆られた。だが、ぐっと堪える。無教養だって？　さっきから無闇に殺すと言ってみたり、成りきりとはいえ、初対面の人に、しかも無関係な一般人（↑変態趣味のない、まっとうな人生を歩んでいる人）に対して失礼にもほどがある。

背を向けて外套を脱ぎ始めた彼に冷たい視線を送る。面としてでは無理だが、見えないところでは強気だ。和架はあーかんべーをし

て心の中で悪態を付く。そしてふと、周囲を見渡せばその贅沢の詰まった部屋に目を見開いた。絨毯やら花瓶やらそういったものに素人である自分が見てもわかる。……絶対に高いよね、これ。と、いった感じにじろじろと辺りを見て、ひとえに感想を述べた後に傍若無人な彼へと視線を向けた。だが、次の瞬間固まった。

（な、な、ななんで、裸になってるのさーーーーー！！！？）

外套だけでなく、その下の服まで脱ぎ始めた彼に瞬時に目を逸らした和架は両手で両目を覆った。ちらりと目を覆ったまま彼の方を見ると、上半身を晒した彼が手の平の隙間から見える。大丈夫だ、ズボンは穿いている。彼は、テーブルに置かれたグラスに何やら怪しい液体を注ぐとそれを一気に呷った。

「脱げ。…言われた通りにしなければ、お前の大事な国が近いうちに滅ぶことになる。……まあ、いつか俺がこの手であの王の首を奪いにいくがな」

物騒なことを言っていることは分かった。けど、だからと言って彼に従う意味と理由が見つからない。それに何故に私までもが脱がないといけないのだろう……まさか、コスプレーヤー団に加入させる気なんじゃ……。変な衣装を渡してきたらどうしよう――？

そうしているうちに彼は寝台へと近づいてきた。

「だ、誰が脱ぎますかぁー！　――こ、来ないで下さいっ」

近寄ってくる彼に和架は寝台の隅へと後ずさる。彼が寝台に上がると軋む音がやたらと大きく聞こえた。寝台上にあった薄い布団をぎゅっと握ったまま徐々に後退する和架を文字通り、彼は追い詰めてくる。

「逃げるな」

「――ちょ、ちょっと待ってください！　どうして私がこんな目に合わなければならないのでしょうか……？　というか、ここ何処ですか。早く、家に返して欲しいんですけど……あっ！」

力強く、腕を掴まれる。寝台の背凭(せもた)れへと強制的に押しつけた彼との距離はわずか数センチ。そして彼はきつい一瞥をくれた。

「お前は、アルカンシエルの王からの捧げモノだ。それをどうしようと俺の勝手だ。――家に帰りたいだと…？　何をふざけた戯言を言っている」

彼は小馬鹿するように鼻で笑った。さっきから王とか、姫とかファンタジーチックな単語――これも成りきりコスプレプレーヤーお決まりの演技の一環なのだろうけど、そろそろちゃんとまともな会話をして欲しい。せめて、古今東西一般常識な会話を――。

彼の赤々と燃えるような深紅色の瞳の中に怯える自分の姿が見えた。上で縛り上げていた髪の一房が、サラリと肩に落ちる。今から起きるそれに、和架が逃げること出来なかった。

「ん――――っっっ！！！」

逃げないように腕を頭へと回し、彼は顔を近づけてきた。そして乱暴に唇に自分のそれを押し当てて、抗う和架を無理やり力でねじ伏せる。それまでカラカラで乾燥していた唇が彼の唾液で潤いを取り戻し始める。苦しい、そう思って懸命に彼の広い胸板を押すがまるでビクともしない。そればかりか抵抗すればするほど全体重で圧し掛かってくる。くらくらする意識、そろそろ限界域に達するのも時間の問題だった。

「満更ではないような顔をしている。――そんなに良かったか？」

長い接吻、それがようやく放された時、彼は和架から顔を離して第一声にそんなことを言った。嵐のような荒れた息遣い、それ以上だったら窒息死したかもしれない。

手の平が風を切った。刹那、

――――――パシンッ！

「ふざけないでっ！」

和架の利き手の左が見事に彼の頬にクリーンヒットする。ひるんだ彼を押し退けると、寝台から飛び降りて部屋の隅へと逃げる。手加減なく、打ってしまったことに罪悪感を感じて彼を見た。そこには血の気のない綺麗な肌に真っ赤に腫れあがった頬があった。ギロリと射殺せるような目で睨んでくる彼に『しまった』と和架は小さく悲鳴を上げた。

「……とんだじゃじゃ馬姫が来たものだ、な。……変な服は着ているは、狂暴だは、自分の役目も果たせない。――俺を嘗(な)めてるのか？」

寝台に一度座り直した彼は、そのまま腰を上げた。

「――――ち、近くに寄らないで下さい！　ななんで、キスな、なんかぁああっーー！！　……うわぁあああーーー」

和架は何度も口を拭った。そして頭に蘇ってくるさっきの出来事を思い出しては、顔を青ざめている。ことあまりにも力の限りに口

元を擦ったせいで、すでに真っ赤になり始めているのをよそに和架はしばらく服の袖で拭っていた。

「……ファーストキスだった…のに」

パタンと力が抜けて絨毯が敷いてある床へとしゃがみ込む。ぶつぶつ呟いていると、大きな影が和架を覆った。

「――立て。続きをしてやる」

そう言って、腕を強く引っ張った彼の胸（↑それも上半身、裸！）に体当たりするようにおさまった。再び、押し倒されるように寝台へと戻される。その時、結っていた髪が解け、背のところまで伸びた黒髪が寝台の上に広がった。

「うぎゃっ…」

「色気のない。まるで蛙の泣き声だな。……誘えないのか？　それともそれがアルカンシエル風の誘い方か？」

「は、放して！　このキス魔っ……もし、ここで何かしたら、警察に訴えて突き出してやりますからね！」

「お前を抱くのにそれ以上の何もない。安心しろ」

両手を押さえつけられて身動きが取れない和架に、彼は満足そうに口元を弧にした。その顔を見た瞬間、和架は身の危険を感じて強

張る。抵抗しようと力を入れるが、ビクともしない。所詮、男女の力の差など目に見えている。

「ふ、むぅんっーーー！！！」

馬乗りで覆いかぶさり、今度は首筋に顔を埋め始める。しかし、和架はそこにできた隙を見逃さなかった。――一気に蹴り上げるべし！

「うっ――」

彼から、短い悲鳴が聞こえた。本来なら言葉に出来ないアソコを蹴るのが撃退に一番効くのは知っている。だが、彼の体の比と私の足の届く距離からして、それは無理に等しかった。効いたかどうかは定かではないが、彼が身を引き、行為を止めたことからして見事にみぞ打ちを食らったと見える。和架はひとまず貞操を守ったことに、内心ほっとしたのであった。

6話

アルカンシエルの都市から隣接した街にある旅宿の厩舎で一頭の馬が蹄を掻き鳴らした。括り付けていた手綱を引いたエシェックはその馬を外へと誘導していく。厩舎の外には最近馴染みの見知った顔が馬に跨いで、こちらの準備が整えるのを待っていた。

「また随分と早い呼び出しだね。城で何かあったのかな？」

真面目な表情で彼は頷いた。ここら辺では珍しい鈍い赤色という髪質を持った彼の出身国はニュアージュだという。確かに少し褐色した顔立ちはどことなくあそこら地帯の雰囲気を持ち合わせている気がするが、髪とは正反対の色である青い瞳はどことなくアトモスフェールの人種を思い出させる。八年前まではニュアージュに住んでいたらしいが、住んでいた家を盗賊に襲われ、両親を失い、母親の実家であるアヴェルス国へと、運良く生き残った義妹と二人で移り住んできたという。まったく良く出来た話だ。

「ラルム様の命にてこちらに参りました」

ラルムがアトゥを寄越すということ、それをエシェックは良く理解していた。本来なら新米である彼がここへ来るはずがない、しか

し彼が来た。少なくとも、大事な何かが起きたのだ。

「アルカンシエルの使者二人に陛下が自ら手を下したこと、そして棺桶を送られてきたことの報告に来た次第であります」
「……棺桶を、か。確かに使者を二名送ったということは小耳に挟んでいるよ。……まさか棺桶に入れて贈りに行ったとはね」

後半の方は彼に聞こえないように呟き、何がなんでも報告しておくべきだと後悔する。アルカンシエルの城下で情報収集に熱を入れすぎた為に、先手を打たれたわけだ。今回即位した王は相当の根回しのできる頭の切れたヤツだということがこれで証明された。橋の補修工事という名目で城下外のすべての出入り口を閉鎖され、先に足止めを食らい、邪魔されることなく進められてしまった。こうなれば、もう後の祭りだった。

「使者のことは……まあ、侮辱と取って片付けられるから平気だね。そうだ、アトゥ。棺桶が何故送られてきたのか、もしよかったら少し君の意見を聞かせてもらえないかな？」
「…すみませんが、エシェック団長。自分にはそれがどういった意味なのか、恐れ多くて、図ることはできません。……ですが、陛下はそれを、」
「最悪な方へと取ったわけだね」
「……はい」

恐らくアトゥが来たということは、その棺桶の中のモノは最悪な結果には至らなかったようだが、彼がその中身の内容についてまっ

たく知らないということはやはり何かが起きたのである。もうしばらく城とは離れた郊外で様子を窺うつもりであったが、敵国にこちらの存在がバレ、その上、城で起きている事態を収拾する為にはいったん自分が戻ったほうがよさそうだ。

自慢の愛馬の首元を撫でて、すぐさま馬へと跨る。手綱を引けば、馬が雄叫びをあげながら、前足を高々と上げた。調子は上々だ。休みことなく、一気に我が城へと走らせれば朝方には着ける。

部下であるアトゥは来た道への方向へと馬の向きを変えている。エシェックはその彼に近づいて、力任せに肩を叩くと、そのまま馬と共に駆け出した。よろけるアトゥを振り返って、にこりと微笑む。

「――アトゥ、城まで競争しよう。さて、君はこの私に勝てるかな？」

▲▽▲▽▲▽▲▽

エシェックとアトゥが城へと馬を走らせている頃、城内のある一

室ではある少女による攻防が行われていた。

宙をもの凄い速さで通過する枕を叩きつけ、さらに眉間の皺を深くしたロビュストはただいま最高潮の領域を達する勢いさの不機嫌さ見せている。その場を威圧するという凄(すさ)まじい殺意を放ったまま、身を守る術がなくなり動けないでいる和架に向かって歩み寄って来る。見事に出口の扉とは正反対の壁に追い込まれてた彼女は、できる限りに身を縮めて折った膝に頭をくっつけると両腕を頭を覆うように隠す。

「屍(しかばね)になって自国に送り返されたいか、俺に抱かれるか――どちらがいいか答えろ」

ロビュストは剣を鞘(さや)から抜くと、その剣を床へと突き刺す。その音に彼女はビクリと肩を震わした。

「答えぬか」

先程とは打って変わって、震えて声も出ない小娘のビビリように、いくらか満足感を覚える。だが、一度までか二度までもこの俺を平手で打ち、腹を蹴って大恥をかかせたこの小娘を許すはずがない。油断していたからといってこんな小娘ごときに、と考えただけで腹が煮え繰り返る思いである。殺すだけ、という生易しいものじゃ済まさせやしない。

ロビュストは鼻で笑うと、芋虫のように縮こまる小娘を見下ろし

た。

「答えないというなら、仕方ない」

ロビュストは和架との距離を一歩縮めると、彼女に手を伸ばした。

「いやぁあ！　――痛いって、痛いから放して下さいっ」

彼女の腕を引っ張り、その反動で起き上がった瞬間にロビュストは長い髪を指に絡めると、一気に引き上げた。案の定、その痛みに耐えられない彼女は少しでも和らげようとし、ロビュストのされるがままに腕の中へと収まった。次に仕返しの手始めとして、一発ぶん殴ろうとした時である。

ロビュストはその手を止めた。

指を絡まった髪から解き、その手を和架の顎へとかけて顔を上向きにさせるとじっと彼女の顔を覗き込んだ。

「……な、何ですか」

そんな声が聞こえてくる。だが、ロビュストには聞こえていない

のか、ただ少女を見入るように見た。

混ざりのない黒髪に黒い瞳に透き通った白い肌。良く見れば、その姿は生前は高嶺の花といわれ、崇拝され、愛されて、誰もが知っている神話にも登場する女神――その女神に、彼女の容姿はあまりにも彼の人物の写し絵のように似ていた。

「……お前は――の化身か？」

7話

――――お前は、ディユの化身か？

いまだ目を見開いてこちらを凝視し、なかなか離してくれないことに痺(しび)れを切らした和架は、掴まれていない片一方の手でちょうど届く彼のわき腹をトンと叩く。それにハッとして我に返った彼は、ガッチリと掴んだ私の顎からすぐさま手を離した。

「興がさめた。……こんな小娘ごとき、殺すのも面倒だ」

離れ際に呟いた言葉に和架はひとまず安心して、彼から目を離さずに距離を保つ為に、花瓶とか骨董品が並べられている棚の方へと移動する。ソファーへと腰を下ろした彼はさっき飲んでいたグラスに再び液体を注ぎ、飲み始めていた。色からして、たぶんワインか何かだろう。

「名乗る権利をやろう、お前の名は何だ？」

庶民の自分にはそれに価値があるのかは良く分からないが、棚の中に並べられた旧ヨーロッパのノスタルジックな品々を眺めていた和架はピクリと反応して彼を振り返った。

名乗る権利、ということは名を名乗れと言っているのだろう。出会い始めからそうだが、何で彼はこんなにも偉そうなんだろうか。許可なく、人様の唇を奪うは横暴じみた行為――――人間として最悪過ぎますよ、ええ。もし、それをか弱き乙女にやっていたら本当に警察沙汰になること間違いなし！（↑生憎、私はか弱くなし、キスなんて犬に噛まれたようなものだと割り切るから訴えないであげるけどっ）それと、公共の場で抵抗してる女の人に襲い掛かったら、いくら顔良しの貴方でも御縄頂戴だからね。世間はそんなに甘くないんだから。

「和架」

「――私の名前は和架といいます。あなたの名前は？」

ぶっきら棒な態度で相手を睨みつけた。

「ふ、まったくなにもかしこも変な女だな。……ノドカか、覚えて

おいてやる」

こちらを見ることなく彼はひとりごちる。

「それで、あなたのお名前は？」

和架は好奇心を抑えられなかった。彼、何て名乗るだろうという好奇心。

「……お前は、俺に名乗れといっているのか？」
「はい。……私も名乗ったわけですから、教えてくれますよね？」

はっきり言って、このまま関わりなく終わりたい関係だ。この人と一緒にいようものなら命が幾つあっても足りなさそうだし、こちらの身も持ちそうにない。しかし、ふつふつと沸いてきた好奇心は止められなかった。彼はいったい何処まで成りきり者なのか、ということを確かめたい気持ちでいっぱいである。言っちゃった、と内心慌てるがうきうきする私もいた。

横目で視線だけ飛ばしてくる彼と目が合えば、それだけで嫌な汗が出る。蛇に睨まれた蛙、とはまさにこのことであろう。

「名乗るのには勿体無いなさ過ぎる名だが———まあ、今宵は記念すべきお前の宮殿入り。いいだろう、答えてやる」

待ってました、といわんばかりに和架は彼に体を向けた。それと同時に、ソファーに優雅に座る彼が妖艶に微笑んだ瞬間であった。

「ロビュスト・メイユール・アヴェルス、このアヴェルス国現国王。――よく来られたな、アルカンシエル第二王女ノドカ姫。貴女を今宵をもって側妾として祝福し、丁重に扱ってやろう。それはもう丁重にな」

薄っすらと笑った彼、その後ろに一瞬魔王が見えたような気がした。まあ、設定的に王様らしいんだけど。やっぱり、この人、危ない人だよね、ある意味で……と、再認識。そういえば、“そばめ”って何だったけ？　ああ、それと私、姫なんてそんな素晴らしい高貴なご身分じゃないんですけどね……。

（あはは……。私、これからどうなるんだろ……？）

凄まじく吹っ飛びすぎた彼に、これからどうやって解放してもらえるか、和架は必死に頭を巡らせるのであった。

8話

「ただいま湯浴びの準備をしておりますので、もう暫くお待ち下さいませ、ノドカ姫」

全員がお揃いの服を身に纏い（↑コスプレ・メイド服）、数名の女の人達が私を取り囲んであれやこれやと苦戦しながらも私の衣服を無理やり脱がす（↑自分で脱ぐと、断ったものの聞いてくれなかった）と、真っ裸のその上に真っ白なローブを羽織らされた。

着ていた服は綺麗に畳まれて、どこへやらと持っていかれる前に、和架は服を抱えていた女の人から、さっと横から奪い持っていかれるのを阻止した。すると、「盗んだりしませんよ。洗濯をするだけです」と言われて和架は顔を真っ赤にした。けれどここは従わない。「いえ、洗濯は結構なので」と服を背へと隠し持つ。恥ずかしい、だが無闇に人を信用しちゃだめなのだ！　もはや経験者は語るの領域、用心するに越したことはない。

「――それはなりません、ノドカ姫。そちらのお召し物は汚れております」

「……あの、…でも、」

「汚れております」

「…その、けっこう、……ですから」

「汚れております」

「うっ。……ど、どうぞ」

もう、いい。持ってけドロボーーー！　と、内心叫びたかった。悲しい、なんなんだあの逆らえられない気迫は……！　あの、ロビュサタ…いや、ロビュスタ？　まあ、なんだっていい。あのふざけた変態コスプレキス魔野郎もそうだったが、ここの連中は私の予想外遥か上をいく妄想魂軍団だ。ある意味ここまで本格的だと返って私もつられて……いや、私は断じて姫君になどなりたくないぞ。あのメルヘンチックな絵本の世界に出てくる小人たちに囲まれた姫様になりたいとか、継母にいじめられるもある魔法使いによってお妃までのぼりつめた姫様になりたいとか、そーゆーのは断じて、断じて願い下げだ。むしろ、裏幕に登場する悪女（↑肩幅ぐらいに足を広げ、左手は人差し指をまっすぐ伸ばし斜め四十八度ぐらいに。もう片腕は腰に当てたまま言うのだ。「この雌豚めがぁ！」「さあ、跪きなさい！」とか言ったり……実はけっこう憧れなのだ）にならなってもいいが……。あ、つい本音が……。

（それに、建物の構造からしてほんっと根を入れているんだよね。……建設費とかバカ高そう。あ、こうゆーのは所有者から借りるのか……？　それにしても、日本のコスプレ文化はもはや世界進出規模なんだなぁー。もう、外見は外人さんなのに日本語バリバリだもんね……はぁ、）

彷徨っていたときも、敷地の広さには手入れの届いた庭には驚愕したものだ。それに威風堂々たる中世ヨーロッパのお城もステキすぎる。こういった場所は一般的に庶民の憧れといえば憧れだが、いつまでもいたいと思うような所ではない。我が家に帰りたい、それ

が真面目な願いである。
　最後に残っていた彼女も衣服を和架から取り上げて会釈すると、その場からいなくなってしまった。和架はぽつりとその場に置き去りにされたのである。何故、こうなったのか。無論、そもそもの発端はあの天体観察塔の管理人、あの不潔男のせいに違いなかった。

「……私はこれからどうすればいいのかな？」

　和架のその問いに答えてくれる者はいなかった。

▼△▼△▼△▼△

　たとえ就寝時に起こされようが、無理難題を王に突きつけられようが、この城に仕える者たちは誰ひとりとして不服不満を言わない。王に対する文句や愚痴はたとえ陰であっても言葉に出すことはしない。誰しも己が可愛いのだ。しかし、それをも耐え運よく王に気に入れられたあかつきには名声・地位を手にすることは難しくない。私もその恩恵を受け、甘い蜜をすするひとりに違いないだろう。そしてそれを否定する気はない。

「――ラルム、あの小娘は本当にアルカンシエルの姫君だというのか？」

宮殿の開放を言い渡されて、城は深夜にもかかわらず城に仕えている、特に女中が準備に追われて駆けまわっている。さすがに他国のそれも嫁いでいた姫君を粗末な部屋に通すことはできない。

そして何より彼女が見つかってようやく肩の荷が下りる。やはり嫌な予想は的中していたわけだ。

「ええ、陛下。恐らくはそうでしょう。……間もなくエシェックが帰城します。その折に正確な情報も入ってくるはずです」

エシェックのもとにはアトゥを向かわせている。じき到着する頃合いであろう。

「……どうやら思わぬ足止めを食らい、報告が滞ったようです」

報告書に目を通しながら、ちらりと王の顔色をうかがう。相変わらず不機嫌の色を滲ませている。その度合いは昼間よりも険悪なのは気のせいではないだろう。どうやら、あの姫君と何やらあったに違いない。

（それにしても、あの娘……命拾いしたらしい）

この王相手によくぞ生きていたと思う。彼に気に入られたか、よほど運がいいに違いない。おそらく後者だと思うが……。

「……そうか。後はエシックから直接聞く。お前は下がってよい」

ラルムは「御意」と言うと、頭を下げてその部屋を退室した。……今夜は長い夜になりそうだ。

9話

あるぇ？　扉(ドア)開かないんですけど……！？　もしや、これは……。

――――監禁ですかぃ！！？

和架(のどか)が扉が開かない事実を知り得たのは、その部屋に通されてすぐのことだった。

和架が湯浴びを終え、ちょうどその部屋に入室した時、ベッドメイキングを済ませたらしいメイドと目が合った。彼女は立ち上がると姿勢を正して会釈をしてくる。

「今宵から貴女様の身の周りの世話をさせていただきます。私のことはシエルとお呼び下さいませ」

ひとことで言うと綺麗な女性だった。すらりと背が高く、髪は後ろで束ねて清楚で……、『できる女』という言葉が彼女にぴったり

当てはまる。いや、実際『できる女』なのだろう。私の無アンテナ勘レーダーがそう告げている。

「長旅でお疲れのことでしょう。お部屋を御用致しました。どうぞ今宵はこのお部屋で御寛ぎ下さいませ。化粧室はこの先突き当りの奥の部屋に御座います。それともし、お召し物がお気に召さないようでしたら、こちらの棚に掛けてありますのでお好きな物をお選び下さい」

各国王族、貴族、大統領、首相、　大臣、財界人、有名プロスポーツ選手……などなど、が利用するとゅー某有名ホテルのＶＩＰルームと勝るとも劣らぬ贅を尽くした内装がこの部屋には施されていた。思わず、品定めをしてしまうのは私が一般ピープルの証、庶民ゆえの価値観の違いだ。首を痛めるほどぐるぐると見渡した和架は、輝かんばかりの高価な品々に圧倒されんばかりである。メイドのシエルが「それでは失礼します」と部屋を後にしたことにも気づかずに……。

扉の外側からカチリという鍵の掛かった音が嫌に響いたのを合図に、和架は我を戻した。

「――！　ちょっと、シエルさん。待って下さい！　私、お聞きしたいことがたくさんっ、」

そして冒頭に入る。

……あるぇ？

扉（ドア）ノブをひねると同時に、和架は首をひねらせた。ウソだろ。冗談に決まって……、ガチャン、ガチャガチャガチャガチャッ……ドンドン、おーい。……あはははは、……開かん。

扉の前で腕を組み、しかし頭の中は思考停止、そしてポツリと言葉を漏らす。

「もしや、これは……」

――――監禁ですかぃ！！？　いや、この場合は軟禁なのか？？？？

扉に腕をついて、敗北のポーズをひとり披露。残念無念、もはや逃げ道は絶たれたり……。

傍から見れば、頭のおかしい変人にしか見えない。

「……へっ、くしょん！」

くしゃみと同時に出てくる鼻水をズズッとすすり、両腕をさすって熱を求める。湯浴びを済ませたのはいいが、用意された服（おそらく寝巻なのだろう）は私には全く似合わぬ代物でひらひらしたショーもないドレスで、暖かさを追求したものというよりは着飾る為にあるようなものである。

――――ハ、ハ、ハクション！　せめて、上着ぐらいくださいな。

「それにしても……ここはホントに日本なのか？」

未だに理解不能な状態なのは当然だが、少し冷静になってみればいくらアホな奴（私）でも気づく。コスプレだなんたら騒いでいた私であるが、それは現状拒否反応ゆえだ。よって、この今継続的に続く奇妙な体験の数々は、受け入れたくないが、どうやら現実であるらしいのであるが……。

そう考えたところで、彼女の視線が奥の部屋へと続く手前に設置された衣装棚の方に注がれた。彼女は興味の対象がコロコロと変わり、おまけに自分の身の危険などを一応頭で考えているが思っているほど考えているわけでもなくむしろ無頓着で、さらに図太い度胸をそれはそれは備えているというショーもないがどこかある意味で秀でた人格者なのである（↑本人は自分がバカであると信じて疑ってない）。

「……ふむ、ここは洋服棚か。ふむ、ほむ、ほうほう。これはこれ

は、また随分と大胆な……。まったく、このコスプレ衣装保管棚ときたら、エキゾッチックなドレスからエロッチクなものまでずらりと揃っておりますなー」

ひとまず監禁されたという事実はさて置き、部屋の中を物色し始める和架（のどか）はやはり庶民の血が疼くのを止められない。ふ、ふっふっ。

「これら、一体いくらで売れるかなー？」

そして、彼女のもったいない精神はどこにいても健在なのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4753j/

すり替えられた棺桶姫

2011年12月10日23時58分発行